
道

デクテール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道

【著者名】

NZマーク

【作者名】 デクテール

【あらすじ】

近道をじょつと思つて通つた道で体験した恐怖。怖くしたつもりです。

(前書き)

怖いはずです。
はじめて書きました。

「遅くなつちまつた

そう呟きながら俺は閑静な住宅街をとばす。

日が傾き黄金色の光が家々を染める。

今日は家に家庭教師が来る日だ。

遅れたら親に何を言われるか分かつたもんじゃない。

焦るが鎧付いたチエーンは思ったように回らない。

目の端で捕らえた景色に違和感を感じ自転車を止めた。

こんな道あつたか？

見慣れたいつもの帰り道だがこんな道は覚えていない。

家と家の間に不自然に開いた空間がある。

そう、道というよりは細長く伸びる空間と書つたほうが正しいだろう。

軽自動車一台分くらいの幅があり、両側に家が立ち並んでいる。道は家の方角に向かつていて。

うまくいけば大幅に時間を短縮できる。

だけど、そこにはなんとも言えない違和感がある。

まるで、そこだけ道が死んでいるような。

俺は不安を払いその道へ自転車をこいでいった。

間違いだつたかな？

30分ほどこいだが一向に抜けられない。

もう10分、もう10分としている内に取り返しがつかなくなつてしまつた。

日はもう沈みかけ、家の影が道を覆つている。
そのせいで異様に道が暗く感じる。

街灯は無い。

不安になり引き返すことを考えた。

もう間に合わない。

それなら確実に家に帰るほうがいい。

理性が必死に心の不安を隠そうとしている。

怒られるよりこの道をこのまま進み続ける方が嫌だ。

道の先で何かコワイモノが待っている気がする。

コワイモノってなんだ？

ただ道に迷つただけだ。

高校生にもなつてそんなことを考える自分を笑つてやりたい。

だけど、本能的にこれ以上進むことを拒否している。

俺は本能に従い道を引き返した。

方向を変えるとき道の先にある闇が濃くなつた気がした。

俺は必死でもと来た道を逆走した。

おかしい。

いつまで行つても道が終わらない。

それどころか沈みかけの夕日が放つ赤い光もそれによつて長く伸びた影も変わらない。

「どうなつてるんだよ」

息が上がってきた。

呼吸の音だけが静かな道に響く。

だが止まれない。

止まれば道の向こうのコワイモノが動き出す。そんな気がする。

そうだ、家がある。

道の両脇にある家で電話を貸してもらおう。

今一番したいのはこの不安を消すこと。

電話を借りたいなどといつのは口実だ。

人に会いたい。

そして、今自分がちゃんと現実にいるといつ事を確認したい。

俺は恐怖を押さえ込んだ。

自転車を止め、隣に建つてゐる民家に叫ぶ。

「すみません！道に迷ってしまったんです。電話を貸してください」

返事は無い。

じわじわと恐怖がせり上がつて来る。

叫びだしそうになるのをこらえてもう一度呼びかける。

「すみません！」

窓ガラスに人が映った。

室内が暗くてよく分からぬが確かに人がいる。

男か女か分からぬけど今の俺には女神のように見えた。助かった。

自転車を降りると気が抜けたその場に座り込みそうになった。視線を感じ辺りを見回すと周りの家の住人が全員窓越しにこちらを見ている。

無理も無いなと思った。

あんな大声を出したんだ。

一番最初に呼びかけた民家の住人が窓に手を伸ばす。窓を開けたときにもう一度呼びかけようと思い背筋を正した。までよ。

ふと疑念がわいた。

こんなに薄暗いのになんでみんな電気を点けてないんだ？

バンッ！

住人が両手の手のひらで窓を叩いた。

バンッ！

驚いて後ろに下がると反対側の民家の住民も窓を叩いた。

「うわっ！」

バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン

バンバンバンバンバン。

いつせいに全ての家の住人が窓を叩き始めた。

窓に映るシルエットが狂ったように窓に手を打ちつける。

「うああっ！」

恐怖に駆られて走り出す。

自転車を置いてきてしまったが気にならない。

窓を叩く音はもう聞こえない。

それもそのはずだ。

アレから1時間は走りっぱなし。

だけど、止まれない。

意識の奥で最も古い感情。

恐怖が足を動かす。

止まつてはだめだ。

止まればコワイモノに捕まる。

だけど限界が来た。

心は止まることを拒否するが体が止まつてしまつた。

冷たいアスファルトの上に倒れこむ。

逃げなきや。

恐怖に駆り立てられて地面を這つて進む。

膝と腕が擦り剥けた。

血がにじむが気にしない。

止まればコワイモノが来るから。

まだ口は沈まない。血のような赤を民家に投げかけ、民家はそれを不吉な黒で返す。

制服が破れて腹も擦り剥けている。
這つた後の道が赤く染まっていた。

手にも足にも激痛が走っている。

でも、止まつて見る余裕は無い。

コワイモノの気配はだんだんと大きくなつている。

絶望した。

俺は歪み、捻じ曲がり、原形をどぎめでいい自転車の横を通り過ぎた。

引きちぎられた泥除けに俺の名前があった。

嫌だ。嫌だ。怖いコワイモノが来る。すぐそこに。来てる。

俺は叫びながらペースを上げた。

痛みで意識がとびそうだ。

だけど、気絶しちゃだめだ。

コワイモノに捕まつたら……。

俺の後ろの道で闇がゆらりと動いた。

(後書き)

感想待つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8150c/>

道

2010年10月28日07時36分発行